環境問題と温故知新

松木　秀明

東海大学　医学部

環境問題を考えるうえで，最も大事なことは自然との共生であることは疑問の余地はないと思われる。例えば，メソポタミア文明は紀元前4300-3500年頃，治水潅漑農業が成立し，その後の諸都市の起源となる集落が形成され，豊富に得られた水を利用した小規模な潅漑農業が食料生産を支えていたが，紀元前2800-2700年に入ると気候の乾燥化が起こり，潅漑用水に含まれる塩類が水分の蒸発によって次第に土壌に蓄積し，塩害による生産減少により文明が滅びたとされている。しかし，エジプト文明は，毎年のナイル川の洪水のために，毎年新たな肥沃な土壌を得ることができ，その範囲で長く農耕を続け，それに支えられる文明を継続することができたとされている。

日本においては，江戸時代，国全体は鎖国している中で，当時のロンドンの10倍以上という100万人もの人口をかかえた大都市江戸が，物質の循環を基調とし，自然と人間との共生も維持しつつ，比較的安定的に継続していた。たとえば，江戸時代には，鋳掛け（金属製品の修理専門業者）：古い鍋や釜などの底に穴が開いて使えなくなったものを修理する職人，瀬戸物の焼き接ぎ：割れてしまった陶磁器を，白玉粉で接着してから加熱する焼き接ぎで修理してくれる専門職人。箍屋（たがや）：桶や樽は，木の板を竹で作った輪で円筒形に堅く締めて作ってあり，この箍が古くなって折れたりゆるんだりすると，新しい竹で締め直す職人などが存在し，その他にも，提灯の貼り替え，錠前直し，朱肉の詰め替え，下駄の歯入れ，鏡研ぎ，臼の目立てなど，さまざまな修理専門業者がいたとされている。江戸時代の日本は，利便性を追求した大量生産・大量消費社会ではなく，限られた資源を最大限に活かして経済を維持し，文化を発展させた循環型社会の一つのモデルと考えられる。

これらに共通するのは，人間が自然を利用し，あるいは自然の資源を採取する際には，限られた資源を消耗し尽くさず，損ない尽くさずに自然の生態系の営みを維持しながらこれと共存して持続的に利用する，という抑制の利いた行動様式が社会の習慣ないし規範となっているということであろう。

室内環境についても，先人の知恵として校倉（あぜくら）造りがある。校倉造りは，1000年以上の長い間，季節の激しい変化に対応できるように考えられた先人の知恵である。組まれた木は，空気が乾燥したときには縮み，外の空気が中に入ってくる。逆に，湿気が多い梅雨時などには木が膨らんで壁を密閉し，湿気が中に入らないような構造となっている。

徒然草の作者，吉田兼好法師も「家の作りは夏をむねとすべし。冬はいかなる所にも住まる。暑きころ，わろき住宅は，堪へがたき事なり。」とし，日本の家屋について，障子，ふすま，板製の雨戸，高床で開放的な家，すなわち，通気性の良い家が日本の家屋として良い家であることを示唆している。